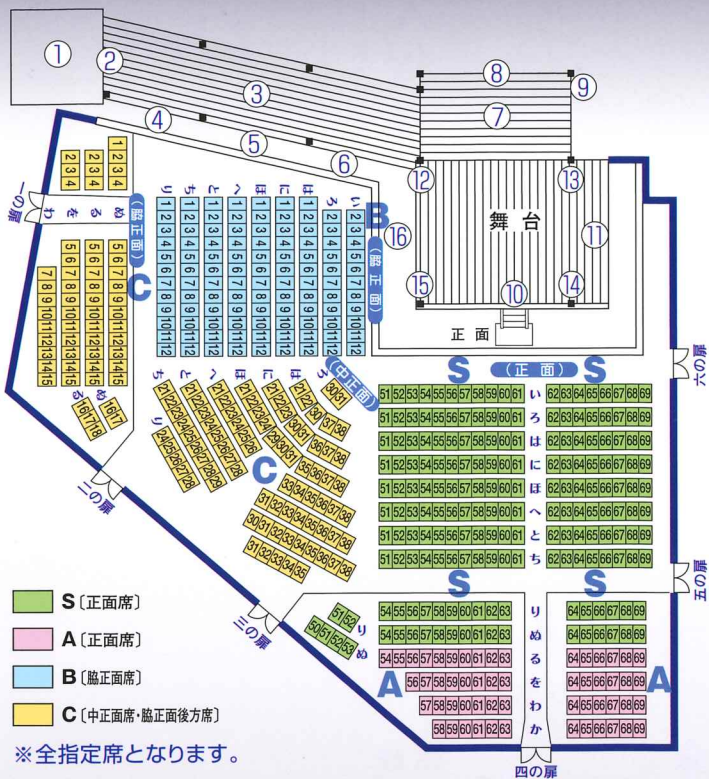


宝生能楽堂座席表(舞台平面図)



■ 舞台平面図

① 鏡の間	② 揚幕	③ 橋掛り	④ 三の松
⑤ 二の松	⑥ 一の松	⑦ 後座	⑧ 鏡板
⑨ 切戸口	⑩ 階(きざし)	⑪ 地謡座	⑫ シテ柱
⑬ 笛柱	⑭ ワキ柱	⑮ 目付柱	⑯ 白州

能楽堂とは

能を上演する専用の舞台を能舞台といい、四本の柱に囲まれた三間(約6m四方の本舞台)を中心として、右側に地謡座、正面奥に後座と松の描かれた鏡板をもち、左側に長さ四間ほどの橋掛りを備えた独特な形をしています。

この能舞台は元々屋外にあり、野天の白州や対面する建物が客席になっていましたが、明治以降、屋根付きの舞台と付随する楽屋・客席ごと建物に収容され、能楽堂と呼ばれるようになりました。

昔ながらの屋外舞台も全国に数十カ所現存しています。

【チケット料金】(税込) **全席指定**

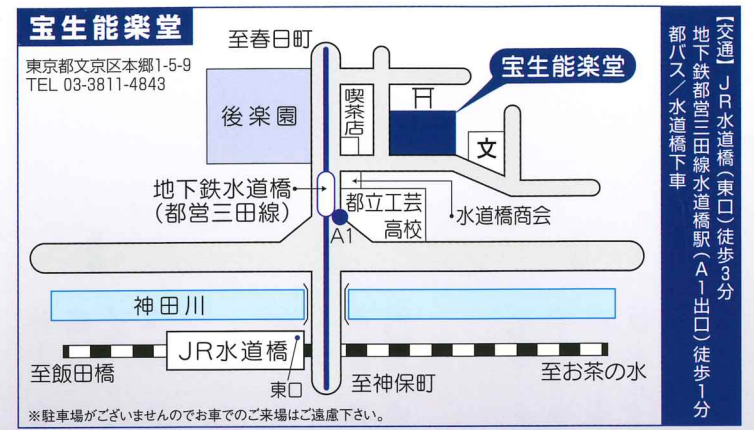
◆ S席……10,000円 ◆ B席……6,000円
◆ A席……8,000円 ◆ C席……5,000円

【チケット取り扱い】 **5月19日(金) 午前10時より**

◆ 電話 (有人対応 平日10時~12時、13時~15時)
チケットスペース ▶ 03-3234-9999

◆ インターネット
e+イープラス ▶ <http://eplus.jp/> (PC・携帯共通)

*販売は上記に限り承ります。
*本公演は未就学児のご入場をご遠慮頂いております。



【お願い】

- *上演中の撮影、録音、録画は固くお断り致します。
- *上演中はアラーム及び携帯電話の電源をお切り下さい。
- *出演者はやむを得ぬ事情により変更させて頂く場合がございます。
- *舞台進行が常と異なる場合があります。
- *今後の状況により、公演が中止または変更になる場合がございます。
- *開場前のご来館につきましては能楽堂館外にてお待ち頂きます。
- *新型コロナウイルス感染防止対策にご協力下さい。
- ◎対応策は状況に応じて適宜変更していく可能性があります。最新情報は能楽協会公式サイトにてご案内致します。

◆ 公演に関するお問合せ ◆ ※チケット販売受付は致しませんので予めご了承下さい。
公益社団法人能楽協会 東京支部 ☎03-5925-3871 / <https://www.nohgaku.or.jp/>



第四十五回 **納涼能**

能親世流「養老・水凌之伝」
親世 清和

ユネスコによる
人類の無形文化遺産「能楽」

令和5年7月21日(金)
開場/午後1時 開演/午後2時
会場 **宝生能楽堂**
主催/公益社団法人能楽協会 東京支部

ごあいさつ

納涼能は本年で第四十五回を迎えました。これもひとえに皆様のご支援の賜物と深く感謝しております。

第四十五回の節目公演ですので、豪華な曲目を選定し、シテ方五流総出演、能楽師によるミニ講座と組み入れました。

お暑い時期ではございますが、能楽に親しむ良い機会かと存じます。万障お繰り合わせの上、ご来場賜りますようお願い申し上げます。

東京支部長 朝倉 俊樹

撮影「養老」前島 吉裕 / 「七人狸々」伊東 祐太

番組

〔開演 午後二時〕

三二講座 和久莊太郎

能 (観世流)

前ツレ(樵夫) 観世三郎太
後ツレ(楊柳翁) 観世 淳夫

前シテ(樵翁)
後シテ(山神)

観世 清和

養

老 宝生 常三
水波之伝 館田 善博
ワキツレ(従者) 梅村 昌功
ワキツレ(従者)

大鼓 亀井 広忠 大鼓 林 雄一郎
小鼓 飯田 清一 笛 松田 弘之

坂口 貴信
後見 武田 尚浩
上田 公威

木月 宣行 山崎 正道
谷本 健吾 山階彌右衛門
角 幸二郎 観世鍊之丞
坂 真太郎 浅見 重好

休憩 二十分

〔三時五十五分頃〕

狂言 (大藏流)

腰

祈 シテ(祖父) 大藏彌右衛門

アト(舞の殿) 大藏 章照
アト(太郎冠者) 大藏彌太郎
後見 吉田 信海

小舞 (和泉流)

名取川 野村 万蔵

地謡

河野 佑紀
野村万之丞
野村拳之介
石井 康太

仕舞 (金春流)

八島 金春 憲和

地謡

井上 貴覚
高橋 忍
辻井 八郎
本田 芳樹

仕舞 (喜多流)

松風 香川 靖嗣

地謡

佐々木多門
金子敬一郎
中村 邦生
内田 成信

仕舞 (金剛流)

山姥 金剛 龍謹

地謡

元吉 正巳
宇高 竜成
廣田 幸総
坂本立津朗

休憩 二十分

〔五時五分頃〕

能 (宝生流)

ツレ(狸々) 東川 尚史
ツレ(狸々) 亀井 雄二
ツレ(狸々) 澤田 宏司
ツレ(狸々) 高橋 憲正
ツレ(狸々) 小倉伸二郎
ツレ(狸々) 大友 順
シテ(狸々) 宝生 和英

七人狸々

福王 和幸

大鼓 國川 純 大鼓 大川 典良
小鼓 観世新九郎 笛 一噌 幸弘

後見

武田 孝史
野月 聡
小倉健太郎
和久莊太郎

地謡

小林 晋也 金井 雄資
水上 優 田崎 隆三
山内 崇生 今井 泰行
高橋 亘 藤井 雅之

〔終了予定 五時五十分〕

能 養老

水波之伝

美濃国・本巢郡に霊水が湧き出るといふ伝えを聞いた雄略天皇の勅使(ワキ)の一行は、本巢郡へ赴きます。養老の瀧と呼ばれる霊泉に着くと、老人と息子(前シテ・ツレ)の二人の樵夫が現れ、勅使にこの瀧の謂れを教えます。ある時山路に疲れ、この泉の水を飲んでみると、気分も爽快になり疲れもとれたのです。そこで汲んで持ち帰り、父母にもこの水を飲ませました。「勅使が帰ろうとする、天から光が差し、音楽が聞こえてきます。(中人) やがて楊柳観音(後ツレ)が現れ、清らかな薬の水を讀え舞を舞います。そしてこの山の神(後シテ)が来現し、「神と私は水と波のように同じものであり、私が衆生済度の為の方便として神の姿で現れたのである。」と颯爽と神舞を舞い、目出度い御代を寿ぎます。

狂言 腰祈

寿命めでたい祖父のところが修業を終えた郷の殿(孫)が帰郷します。

郷の殿の久しぶりの訪問に、嬉しくて仕方ない祖父と冠者ですが、成長して山伏に成った姿を、皮肉混じりにも幼い頃の事を言つては懐かしみます。 すっかり歳をとつて腰のまがつた祖父を気の毒に思つた孫は、祈禱で腰を治そうと試みますが、果たしてその修行の成果はいかに。

小舞 名取川

狂言「名取川」より。比叡山に上り受戒し名をつけてもらった遠国の僧。物覚えが悪いため袖に名を書いてもありますが、帰途に川を渡ろうとして深みにはまり、袖に書き付けた名が消えてしまいました。川底に名を落としたかと思ひ川に入つて名を探し回る。その部分の小舞で舞います。掛詞を用いつつ各地の川の名を連ねた謡になっています。

仕舞 八島

屋島の浦に着いた僧が出会つた漁師は、元暦元年の源平合戦のことを語ると姿を消してしまいます。僧の夢の中に先程聞いた源平の戦いの場面が甦り、源義経が現れ勝利を取めた様子を見せるのでした。仕舞では義経の勇壮な戦場面を再現します。

仕舞 松風

須磨の浦を訪れた僧が、二人の美しい海人乙女の塩屋に宿を借ります。二人は実是在原行平の愛を受けた松風村雨姉妹で、昔の思い出を語るうちに松風は恋慕狂乱の舞を舞います。

仕舞では行平の形見を身につけて狂おしく舞い、僧に供養を頼み吹き渡る松の風を残して夢の中へ消えて行く所を演じます。

仕舞 山姥

山姥の山廻りを題材とした曲舞の名手として百万山姥と異名をとる都の遊女は、深山の中で真の山姥と相まみえます。月の夜に語られる山姥の境涯、やがて山廻りの様をあらわして舞う山姥は山また山を廻りつつ姿を消します。キリの仕舞では、山姥が四季の移ろいのなかで雪月花を求めつつ山々を廻り、深山へと姿を消す終曲の場面を演じます。

能 七人狸々

唐土・金山の麓の揚子に住む高風(ワキ)の店に度々訪れて酒を飲む人を不審に思い名をたずねると、「海中に住む狸々」と名乗つて消え失せました。

夜更けに瀋陽の川のほとりで待つていると狸々(シテ一人・ツレ六人)が現れ、友に会えたことを喜び、舞を舞います。心根の真つ直ぐな高風を褒め称えて汲んでも尽きることのない酒壺を返し与え、尽きることのない世を祝福します。

『七人狸々』は、幕末の宝生大夫一代能の「弘化勸進能」の折に作られた「狸々」の小書(特殊演出)。シテを含めた七人の雌雄の狸々が登場して賑やかに相舞を舞い、シテが乱を舞つた後、酒壺に集まつて酒を飲む型をします。